

# ロレンスの愛の構造

— 『不倫』の場合

田 中 實

## 1

人間の愛の構造は様々であるが、動物とは違う人の愛情関係とくに男女の愛のかたちについては作家により力点のおき方が異ってくる。ロレンスの『不倫』(*The Trespasser*, 1912) とほぼ同時期にフランスの作家アンドレ・ジッドは『狭き門』(1910) を書き、聖書の説くモラルを遵守し、厳格な自己犠牲に生きた悲劇を語っている。打って変わって、ロレンスの『不倫』はいわゆる精神主義的な小説ではない。『不倫』は『白孔雀』(*The White Peacock*, 1911) に次ぐ彼の初期2作目の長編小説であり、『不倫』のあとに代表作『息子と恋人』(*Sons and Lovers*, 1913) を書いている。『不倫』はこれまで天才の駄作とか言われて、その真価が認められなかったが、こうした主人公の浮気は日本でもよく見られることであり、一夫一婦制の近代国家における永久不変のドラマである。

作家の創作においてはその作品中にとかく私小説的に作者の実体験が混入もしくは変形されて取り入れられることがある。『不倫』も例にもれずロレンスの自伝的、個人的要素が見え隠れする。ロレンスは新心理主義の作家といわれるが、作中人物の心情や情緒の深層を微に入り細にわたって表現している。

本来、家庭は寛ぎの場であるはずのものが、主人公シーグマンドは夫

として父として失格者である。というのも他に愛する若い女性がいてただならぬ交際をしているからである。妻には冷淡に扱われ、五人の子供たちからも軽蔑の目で見られている。いわゆる一家の団欒が見られないのである。夫シーグマンドは妻に高圧的に支配されるような家庭生活が耐えられないのだ。家庭は崩壊寸前にあるといえる。シーグマンドは威圧的な妻に不満があるとはいえ、妻を裏切り、父親の役目を十分に果たしていない彼に責任の大半はある。

作者ロレンスは小学校教師時代に同じく他校で教師をしているヘレンと知り合い、交際しているうちに、彼女が付き合っていた妻子ある男性との数日間の親密な生活を彼女が日記風にメモしていたものをロレンスが借りて読み、この小説の素材としている。『不倫』の最初の章と最後の章はほぼ事実即した記述になっているとモデルとされるヘレンは語っている。その他の章はロレンスが脚色したフィクション的要素が濃厚である。

実在のヘレンには音楽家の恋人がいたが、二人の親密な交際は長続きしないうちに彼の方がみずから命を絶ってしまったのである。その後、ヘレンは一生独身を通していったのだ。ロレンスは現実にヘレンに好意を抱き、幾度か交際を振られた立場であった。ヘレンは亡くなった恋人のことが忘れられず、ロレンスと親しく深い交際をするには至らなかったのである。ここにいささか奇妙なトライアングルが存在したわけである。したがって、『不倫』はヘレンが死んだ恋人のことを綴った記録に基づくいわば口寄せ文学の様相を呈している。

『不倫』は全体が三十一章から成るが、そのうち、十九章分でシーグマンドとその恋人ヘレナが過ごした、海に臨むワイト島の自然の美しさに触れている。<sup>1</sup>

When he ran out on to the fair sand his heart, and brain, and body were in a turmoil. He panted, filling his breast with the air that was sparkled and tasted of the sea. As he shuddered a little, the wilful palpitations of his flesh pleased him, as if birds had fluttered against him. He offered his body to the morning, glowing with the sea's passion. The wind nestled in to him, the sunshine came on his shoulders like warm breath. He delighted in himself.

The rock before him was white and wet, like himself; it had a pool of clear water, with shells and one rose anemone. (32)<sup>2</sup>

美しい砂、海の味がする空気、白い岩肌、澄んだ水などを描写している。ロレンスは鋭い観察力をもって自然に親しみ、自然に対する深い洞察をしている。ローマ神話の林野牧畜の神 (faun) や牧羊神 (pan) を想起させる。この作品は自然への畏敬の念が溢れている。<sup>3</sup>

大空と大地と男女の愛は不可分に結びついている。シーグマンドは家族から追放され、仲間はずれになった男 (outcast) なのだ。彼は一般社会生活も家庭生活も明るく楽しく過ごせる心境にはないのである。それも魅惑的なヘレナのせいである。平穏に見える家庭生活が必ずしも幸せで快適なことばかりではない。誰しも心の闇をもっている。彼にとり暗黒 (darkness) が母であり、月は妹であり、星々は子供たちなのだ。いろいろと摩擦や軋轢を感じながら生活している。ヘレナとシーグマンドはワイト島でこの世のものとは思えない別世界のような、美しい自然に育まれた、平穏で静寂な生活を経験している。

<sup>1</sup> Alastair Niven : *D. H. Lawrence The Writer and His Work*, pp30- 31.

<sup>2</sup> 英文の引用は、Heinemann 版、*The Trespasser* からであり、引用文末のかっこ内の数字はその頁を表わす。以下同様。

<sup>3</sup> Dolores La Chapelle : *D. H. Lawrence Future Primitive*, p.21.

## 2

家庭もちのシーグマンドはヘレナと知り合い、つき合うようになるまでは、ビアトリスの夫として、5人の子供の父として平穏な家庭の一員であった。妻ビアトリスは夫に12歳年下の若い恋人がいるのを察して、「神様、彼女を打ち殺して下さい」(God, strike her dead!)と彼女は言い、ヘレナを憎悪していた。ヘレナはシーグマンドを熱愛していたので、未来への目標に向かって生きるというよりは、現在に生きており、今があるだけなのだ。そして彼女は幸せであり同時に不安でもあった。

濃く広い霧の中にシーグマンドとヘレナは二人だけとなり、長いキスをした。二人は一体となって融合し一つの両性具有の存在となる至福の状態を経験した。ヘレナは旅先でニーチェ(1844-1900)の本を読んだり、ワーグナー(1813-83)をピアノで弾いたりした。ちなみに、ニーチェは若い頃、ワーグナーの影響を受けており、親しい交際もあり、ワーグナー論を書いているが、やがてワーグナーの生を否定するキリスト教的救済の考えに関して、これをデカダンスと否定し、友情は決裂するに至るのである。作者ロレンスは、神の死を説くニーチェへの関心を示しているのである。一方、シーグマンドもまた、ヘレナとのワイト島での暮らしは悦びであり、その明るい悦びの中に少なからず暗い悲しみが潜んでいた。夜ともなればシーグマンドは今夜が永遠である限りすべてが崇高だと感じるのだ。夜が明ければ、広がっていく朝の幸福を実感するのである。

シーグマンドは自分の精神ではなく肉体を自慢していた。自分のしっかりした胸や豊かな股などを自慢していたが、海で泳いでいるうちにその股を負傷してしまう。恋人のヘレナから見れば、シーグマンドはあたかもヒビのようなのだ。時に彼女は彼のような動物性を拒否した。ヘレ

ナは海に似たところがあり、自己充足 (self-sufficiency) していた。他者のことを考え、公平な条件での交感を心がける様子は見られなかった。とはいえ、彼女は彼の胸の上に頭を乗せ、彼の心臓の鼓動を通して彼の魂の声に耳を傾けたが果たせない。ここにはロレンスの物心一如、身心一如の思想が暗示されている。

海は女性に喩えられるのが一般的であるが、ロレンスは男性のシーグマンドを「野蛮な海」(brute sea) のようだと喩えている。恋人ヘレナは彼の中の野蛮さを憎んでいた。しかし彼女は純粹に熱情をこめて彼と愛情の交感をした。彼女にとり、彼は海と太陽が混ざり合ったようにうねり、温か味があり、甘美な中にも強味があった。ところが、彼女は二人の愛が永遠であるとは信じきれず、人生は竜頭蛇尾に、あっけない結末に線香花火的な結果に終ることが多いと予感していた。

ワイト島での二人の甘美な不倫の愛の時間は流れる。人倫にはずれた人道に背いた愛だからこそ、その恋の炎は激しく燃えることにもなるのだ。ヘレナは女性主導型の女ではなく、彼に仕え、柔順になり、彼にリードを取らせるのであった。彼女は彼を愛しているがゆえに彼のために犠牲になろうとし、彼を独占しようとする。彼の熱情を愛を込めて満たしてあげるのであった。シーグマンドはヘレナとの関係を正しいのだ、人倫の道にかなっているのだと感じてしまう。彼は自分に正直になろうとしていたのだ。

シーグマンドはヘレナのことを海に喩えて、

“ You look now as if you belonged to the sea. ”

“ I do ; and some day I shall go back to it, ” she replied. (51)

彼はヘレナを海の一部のように感じている。彼女もいつか海に帰るの

だという。人間が自然の一部であり、今、海に取り囲まれた島に滞在し、海を大空や大地とは異質のものとシーグマンドは捉えている。海もヘレナも自己充足的 (self-sufficient) であり、他者との交感がないものと彼はみなしている。彼女にとっては海もシーグマンドも恋人なのだ。

彼女は彼がそばにいることを意に介さず自己充足的に幸福感に浸っている。そうこうするうちに、島で遊ぶ二人の間に距離感があるのを彼は気づくようになる。子供っぽい彼女に彼も仕えている面があった。要するに、彼女の心理を掴み切れないでいるのだ。

ヘレナには夜の散歩ではその広大な美しい夜が一つの家のように感じられ、喜ばしいものであった。彼女はシーグマンド以外のあらゆるものを消去する完璧な夜の闇を希求していた。シーグマンドと共にある時こそ彼女の存在すべてであった。彼ら二人は「現在をつかめ」(Seize the day) という心境なのだ。現在を楽しめという気持ちである。この言葉はもともと快樂主義、刹那主義の源泉である。“Seize the day”(= Carpe diem) は、「今できることを明日に延ばすな」という本来の意味が、今を楽しむ意味に解されるようになってきている。道元禅師は禅のすすめを説き、「いま、ここ、このことを大切にせよ」「いまを大切に、いまを楽しめ」と言っている。ヘレナとシーグマンドにとり、明日の不確かな未来よりは、今日という日がバラの花のように美しいのである。明日は地獄なのである。

“ You won't leave me, will you, Siegmund? ”

“ How could I? How should I? ” he murmured soothingly.

She lifted her face suddenly and pressed on him a fierce kiss.

“ How could I leave you? ” he repeated, and she heard his voice waking, the grip coming into his arms, and she was glad. (57-58)

ヘレナの心にはシーグマンドに捨てられはしないかという一抹の懸念が脳裏をよぎる。シーグマンドはヘレナを見捨てる気持ちは毛頭ない、断じてないとの答えを聞いて彼女は喜んだ。しかし、彼女には彼がどんな事を考えているのか分からない面があり、彼の心理を読み取りかねていた。シーグマンドには妻子があるのだから、すべての決断は彼の側にあることをヘレナは彼に訴えている。いま・ここ (here-and-now) がすべてであり、彼女の魂を彼の魂に融合させるかのようにキスに浸りもする。彼を憐れに思い、彼女はまるで母のように彼を子供のごとく愛していた。

一方、シーグマンドはヘレナに対し哀れみのこもった優しさを示した。彼女を哀れむことにより振子が生へ傾き、生を実感するのであった。

Then he came to the hour of Helen's strange ecstasy over him. That, somehow had filled him with passionate grief. (63)

彼はヘレナが彼に対して抱いた奇妙なエクスタシーの時を考えたが、それで彼は激烈な悲しみに満たされるのだった。不倫に身をやつしている彼としては濃い夜の闇に彼自身の存在すべてを隠蔽してもらいたいと念ずる。彼は自分が道徳的に臆病者 (a moral coward) なのだと内省する。彼は偶然、旧知のハンプソンに出合い、最も面白い女は男たちの中の野性味や動物性を抑圧しようとするのだという話を聞く。ヘレナは教育のある洗練された女性であったからだ。彼女は他人の楽しそうな姿に屈託のない関心を抱いている振りをしていた。

## 3

ヘレナとシーグマンの二人の間に打開策は見出せない。ヘレナは明るい太陽が彼女とシーグマンの上に沈んで行くのを感じ取っていた。彼が青春の快活さを失い、時勢に屈服した男、着物を着て直立した動物のように彼女には思えたからだ。要するに、彼女は彼に絶望したのである。彼女は彼を失うのではないかという恐怖感に苛まれ、やつれた。シーグマンは人生に消極的になり、彼の心中に魂の中に暗く死が頭をもたげていた。彼の意識はしだいに死の方へ傾斜していく。二人は運命的に一体感や統一感が消滅しつつあった。

だが、シーグマンは死の不毛を考える。自分という人間は何ら重要な者ではなく、取るに足らない者であり、無に等しいのだと思う。自分が死ぬことが無意味なら生きていることも無意味なのだと推論する。とはいえ、死んだライオンより生きている犬の方がましだとの諺を思い出す。みずから死を求めることは恥辱であり不面目なことなのだ。

以前、彼はヘレンに対し彼女が海のように言ったが、今度は逆にヘレンが、シーグマンは海のように言う。海は冷酷に荒波で人を投げ飛ばすからである。シーグマンが情熱の波の中で時どき沈黙し、よそよそしくなるので、抑えきれない恐怖に彼女は襲われた。二人の海での体験で何かを得たと彼女が言えば、彼はすべてを得たという。「きみはすべてだよ」(“You are everything.”)と愛を語るのであった。

ワイト島でシーグマンはヘレナと最後の散歩に出かける。今度は彼の方が、彼女が何を考えているのか真意をはかり知れないでいる。自己充足している (She was sufficient to herself.) ように思えるのだ。彼女は彼とではなく事物と心を通わせ、友だちになれるので、彼を必要としないのだとまで思うようになる。



“ You can't do without me? ” he asked.

“ If I lose you I am lost, ” answered she with swift decision. (105)

彼女はシーグマンドなくしては途方に暮れてしまうとはっきり答える。それにもかかわらず、「死が私の汗をぬぐってくれ、暗闇が訪れるなら」と彼は祈る気持ちになる。彼は死という燃料で燃えているのだ (I burn on the fuel of death)。

彼はヘレナとの不倫で、一人では自分が生きられない (I cannot live alone) ので、妻ビアトリスと子供のところへ戻って元の鞘に納まるか、ヘレナに徹底して走るかジレンマに陥る。ヘレナと妻の二人のうちいずれを取るか板ばさみの状態なのだ。一人になればヘレンが欲しくなる。すでに彼は生の意識から分離してしまっているかのようであった。彼女の方は死ぬことはないだろうと彼には思われた。とにかく、彼女との島での5日間の交遊は彼にとり真の意味での幸福を満喫したものであった。島の生活が終り、彼女と別れる時がきた。人生に何の目的も持っていないヘレナは、これから一人だけでやっていこうと彼には思えた。シーグマンド自身は心身ともに疲れていた。

彼はおずおず妻子のいる家に帰る。妻ビアトリスは泣いていた。父親の浮気に気づいている子供たちからは横柄な非難の声を浴びせられる。彼は自分が家族に対する犯罪者にも等しいのだと思う。一方、恋人ヘレナは自分のものだと彼は感じている。ヘレナの方は帰宅して、罪悪感に駆られながらも家族から咎められもせず、極りが悪く屈辱感に浸っていた。泊りに来た親友のルイーザにはシーグマンドとの交際の秘密を打ち明けていたのである。

シーグマンドはヘレナとの旅を終えてから、ウィンブルドンでヘレナにまた会って言う。

“And I have not made up my mind. But I can't think of life without you.”  
(150)

彼にはヘレナなしの人生は考えられないのだ。ヘレナを捨てて、妻子を扶養し、現在の家庭生活を維持しなければならないと思うがそれができないでいる。ヘレナと別れて沈滞した今の家庭には戻れないジレンマに陥っているのだ。ついに、彼は人生から自分を切り離すことならできると思う。死後のことに思いを馳せると、そこには休息や安らぎ、再生が満ちていて、心地良いように思えた。結局、彼はこの世との別れを自死を選んだ。

シーグマンドの妻ビアトリスにしてみれば、当然、不道德なヘレナこそ責められるべきだということになる。ヘレナの心はシーグマンドの死後も彼と共にあり、彼女の愛は死を越えて彼への思慕の情は続いた。だが1年後には、セシル・バイアンと知り合い、新たな恋愛が芽生えているところでこの小説は終わっている。

かなわぬ恋に絶望した彼はただ自分を責め苛み、悩みぬき、迷いに迷った末、自分の存在を無にすることを選んだのである。道徳的に臆病者の結論は、この世界から己れを抹消し自己滅却するとともに宇宙の灰塵に帰することを選んだのである。

#### 4

シーグマンドは妻子をもち、家庭生活や演奏家の仕事に束縛されていたが、恋人のヘレナが海に誘ったことからワイト島に旅して数日間を過ごす。この広い美しい海こそは、自然を愛するロレンスにとって自由の世界そのものであった。家に帰れば、妻や子供たちの冷ややかな態度に

接し、シーグマンドとしては忍耐の限度を越えていた。不倫とはいえ、恋愛は、恋の炎は理性を超越した情緒的世界であり、理性をもってしてはどうにもならない面がある。シーグマンドは世間を気にかける臆病者なのだが、恋人ヘレナと縁を断ち、凡庸な家庭生活に戻れず、かといって恋人ヘレナに一途に走ることもかなわなかった。

人間というものは、男自身だけでは不完全であり、女自身だけでも不完全なのだ。男も女も自分にはないものに引かれる。自分にはないものを求め愛することは自然である。異性への愛は人間の本性にもとづく性欲だけでなく、両性の心の通い合いである。また異性愛は人間が自然の一部であることを認識し、自然自体や宇宙全体からの別離、分離を克服する自然な願望に通じるものである。<sup>4</sup>

妻ビアトリスと倦怠する家庭生活を送るシーグマンドは、不倫相手の、夢見る女性ヘレナと一緒にになり結婚する勇気はない。ヘレナは自己充足的でありシーグマンドを必要としないかのようであり、彼女は孤独なのだ。彼女の青い眼は、青い海、青い霞を連想させ、自然の中に溶け込み調和していた。彼が独占欲を働かせて彼女を自分のものにすることは不可能と思われる。彼女から見れば、彼はつれない感じがして彼女を悲しませるのだ。彼は妻子ある身であり悩み迷いはつきない。この人間世界の下部には、冷たい生氣のない、海のような暗黒の世界がある。シーグマンドにとり太陽の輝く世界は逆説的に非現実の世界なのだ。シーグマンドの分身(doppelgänger)、代弁者ともいえる旧友ハンプソンから、人間は己れを克服する努力が絶対に必要なのだとシーグマンドは言われる。彼は己れのエゴを貫徹する覇気は持たない。

ロレンスにとり、男は闇で女は光なのである。ハンプソンは、ヘレナやそれに類する女には気をつけろと言う。最も興味ある女性は最悪だ、

<sup>4</sup> Daniel J. Schneider : *D. H. Lawrence The Artist as Psychologist*, p.31.

女は破壊性を持っている、などとパラドクシカルな事を言うのだ。ロレンスが暗黒 (darkness) によって暗示するものは死 (death) である。あるいは、あらゆるものの無意識、本能的なものの源泉である。今や、シーグマンドは暗黒の中にいる。死や夜や無意識の世界からの衝動に駆られて、この世に辛うじて生きている。生きながら死んでいる男 (living-dead man) なのだ。生と死は分離できないのである。ヘレナはシーグマンドの愛欲をしばしば拒むが、夢見がちな彼女はどちらかといえばシーグマンドの獣性を嫌っていたのである。彼は家庭の妻ビアトリスや子供たちを選ぶべきか、恋人ヘレナを選ぶべきか迷い悩みその決断を迫られていた。道徳的に臆病者は結局、自滅するのである (Siegmond destroys himself)<sup>5</sup>。

人間はどんな境遇にあらうと、本質的に絶対的な孤独がある。なぜなら人間はただひとり裸で生まれてきて一人で死ぬのであるから。

少くとも生物学的な死、肉体の滅亡があるのだ。シーグマンドは遠くヘレナに心を引かれ、身は妻ビアトリスに引かれて、心身ともにまさに引き裂かれる思いであった。ワイト島に逃避行しての自由で甘美な恋人ヘレナとの暮しと、夫として父親としての現実生活との埋めようのないギャップから、道徳的に臆病な彼としては、選ぶ道は現世を去ること、この世の人たちから去ることしかなかったのである。

---

<sup>5</sup> David Ellis and Ornella De Zordo (ed) *D.H.Lawrence Critical Assessments Vol. II*, *Lawrence's The Trespasser Its Debt to Reality*, p.38.